

次世代にも受け継がせたい

“もったいない”の心

伊藤 澄夫 伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

太平洋戦争の末期、三重県は6大都市と広島や長崎、北海道に次ぐ大きな被害を受けた地域のひとつだ。理由は四日市市に海軍燃料所があったこと、重要軍事工場の多かった名古屋に近いことと考えられる。

名古屋爆撃後にB29や戦闘機がサイパンや空母に帰途、名古屋の空爆で残った爆弾や戦闘機の機銃弾を桑名市や四日市市で消化したのだろう。三重県は8カ所が空爆に遭い、民間人9500人が戦死、3万軒もの家屋が損失し、四日市市街は90%消失した。戦時中、海軍燃料所の事務所棟となっていた筆者の母校である四日市商業高校には、多くの機銃弾の跡があった。ゼロ戦などの戦闘機の反撃がないことを知っている米兵は、ガムをかみながら鼻歌交じりで超低空からの攻撃だったのだろう。

終戦後、私たちは廃墟となった四日市市に急いで建築された木造の小学校校舎に通うことになった。1クラス60人近い生徒数が多いとは思わなかった。学校で習った科目のほとんどは忘れたが、今も残っ

ルが定着しており、部屋や休憩時間に電灯がついていることは無い。この習慣がどれだけの節約になるのかを問われれば、大した金額にはならないだろう。しかし、このような習慣を身に着けることで、合理化や改善、コストダウンが図れる効果が大きいと思っている。

社員に常々言っているのは「私はケチではないよ。無駄をなくしたり、カイゼン等での効果金額は必ず皆さんに還元している」ということ。そして、「見た目のもったいないは誰でもわかる。大切なのは、その先」を読む力だ」と、教えている。

金属（銅）部品で例を挙げよう。2ミリの板厚で100ミリの角の仕込み材料の製品が月産10万個とする。金型の改善などにより99ミリの角で同じ製品ができたとすれば月間360キログラムの材料節約となる。金額にすれば月間40万円のコストダウンが図れる。しかも精錬所で360キログラムの材料を余分に作るには膨大な燃料を必要とするのだ。

わずか1ミリの節約は「大したことはない」と思う社員でも、360

ている先生の言葉は「もったいない」だった。

十分な食料や文房具の無い時代で当然のことだろう。鉛筆の品質が悪く、3回ナイフで削ると1回は芯が折れた。それでも子ども心に「鉛筆1本買う金も親にとつては大変だろうな」と考え、10センチより短くなれば次の鉛筆と接着剤でつなぎ、紙とゴムバンドで固定して使い続け、1センチになってようやく捨てることにしたのは私だけではなかった。勿論鉛筆はぐらぐら動き、上手な文字は書けなかったが。

また、すり減った服の膝の部分に布を当てて着る生徒、すり減ったシューズの底は紐でくくったゴムを当てて長持ちさせている者も多かった。

5年生の担任は理科の中村忠先生だった。ある日、中村先生が話した5分間ほどの内容を今も鮮明に覚えている。「20世紀に入り船や軍艦、汽車などで石炭を使うようになった。寒い国での暖房は石炭である。この石炭は何十億年と掛かってできたものだが、いつまで

キタはもったいないと考えるだろう。先読みし、1ミリの節約の時点で、それが大きな効果を生むことを予想できる社員が育ってほしい。

私が朝礼等で話すマナーの話だが、公共施設やレストラン、ゴルフ場や知人宅の手洗いをお借りする時は、トイレトーパーを自宅を使う時より短く使うことを心掛けるよう指導している。

読者の皆さんは経験ありませんか？ レストランなどでトイレの空くのを待っているとき、自宅ではおそらくしないであろう、4回も5回もロール紙を引き出している音を耳にすることが、そのようなことをする者は当社の社員として絶対に採用したくない。

日本の国民1億人がトイレトーパーを1日1枚節約するとすれば、その紙はどのくらいの長さになるか。ここから東京まで？ハワイかアメリカ大陸まで？実は地球2・5周分にもなる。

戦前、世界のトップクラスだった軍事技術を持った日本の技術者は、GHQにより飛行機や武器関連の製造することを封印された。

使えるのだろうか」と先生は心配されていた。

第二次世界大戦より軍艦や商船はすべて重油で、航空機や軍用機もガソリンの時代となり、アメリカで発達した自動車は今や世界に広がった。私は燃料の埋蔵量に大きな心配をしている。50年前に埋蔵量は100年も無いと言われていたものが、なぜか現在も同じように言われている。むしろもつと先まであるという説もある。そのからくりは私にはわからないが、燃料を大切に作る気持ちは変わらない。

小さな節約大きな効果

海外の生産工場では、K A I Z E N、5 S、K A N B A Nなどの日本語が定着しているが、当社の海外拠点ではM O T T A I N A Iもそのまま使っている。「もったいない」に該当する英語がないから

だ。私は会社に入ってから「もったいない」を言い続けてきた。その甲斐あってだろうか、当社の工場は燃料や電気、消耗品の使い方ル

その悔しさを持った彼らは民間企業へ移り懸命に踏ん張った。戦後わずか19年目に新幹線や高速道路を作り上げるといって世界に例がない快挙を成し遂げた先人には「もったいないの心」も存在していたに違いない。その技術は団塊世代に受け継がれ、全世界から注目されるほどの技術大国になったのだ。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。
(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名譽教授、神戸大学非常勤講師を務めて後進の育成に寄与。
2017年4月春の叙勲「旭日単光章」受章。
著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。